

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：32407

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02236

研究課題名(和文)『先代旧事本紀』の総合的研究

研究課題名(英文)Overall Study of SENDAI-KUJI-HONGI

研究代表者

工藤 浩(KUDOH, Hiroshi)

日本工業大学・工学部・教授

研究者番号：90636101

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本文学・日本史学・神道学・日本語学の四分野の研究者による「先代旧事本紀研究会」を組織し、学際的に『先代旧事本紀』の研究史上の問題点と今後の課題を考究する共同研究を行った。平成29年9月に公開研究発表会を実施した。神話としての特徴、用字意識など編纂と内容の問題に加えて、神道の祭儀・思想・文献、訓詁注釈・国学等に与えたの影響について、『先代旧事本紀』の持つ学問的な意義を明らかにした。本研究の成果は、研究代表者、分担研究者に3名の研究者を加えた12名による論文10編とコラム4編を掲載する『先代旧事本紀の現状と展望』(上代文学会叢書)を平成30年5月に笠間書院より刊行し、広く開示する。

研究成果の概要(英文)：A SENDAI-KUJI-HONGI workshop is organized by a researcher of four fields of the Japanese literature, the Japanese history, the Sinto science and Japanese science. It's interdisciplinary, a problem of study history of "SENDAI-KUJI-HONGI" and the joint research which considers future's problem were performed. An opening to the public meeting for giving papers was put into effect in September, 2017. A study representative issues the current state of this late head of the family old matter period "and" the problem which carry 10 theses and 4 columns by 12 people who have added 3 researchers to an allotment researcher more than Kasama study in May, 2018 from Kasama study and elucidates widely for an outcome of this research.

研究分野：日本文学

キーワード：先代旧事本紀 編纂 受容 神話 系譜 祭儀 思想 表記

1. 研究開始当初の背景

『先代旧事本紀』は、近世以降偽書として学問的俎上に上げられることのないまま放置されるに至った。昭和30年代に鎌田純一『先代舊事本紀の研究 校本の部』『先代舊事本紀の研究 研究の部』の刊行により、学術的価値が再認識され、以後研究が進められてきた。しかしながら、その後の半世紀にわたり、十分な研究が展開されてきたとは認め難い状況がある。その原因は、研究が各学問分野で個別に行われており、それぞれの成果を活かすことが殆どなかった点にある。

2. 研究の目的

(1)本研究に於いては、日本文学・日本史学・神道学・日本語学の研究者による共同研究を実施して、総合的な見地に立って『先代旧事本紀』の現在の問題点を明確化した上で、今後の研究課題を明確にし、今後の各分野における研究の進化に資することを目的とする。

(2)具体的には、以下に示す6点を中心に考察する。

・書誌：新たに存在の判明した写本を加えた写本系統の再検討。

・記事：所載の神話・伝説・系譜の検討。

・背景：成立基盤に存する物部・石上・尾張の各氏族、石上神宮、国造制度、神祇制度の検討。

・享受：中古から現在に至る各時代の引用文献の再検討による、後世に与えた影響の網羅的把握。

・表記：序文と本文の文体と表記の研究。

・成立：上記5項目の成果に基づく、成立事情への理解の進化。

3. 研究の方法

(1)研究代表者と研究分担者8名による「先代旧事本紀研究会」を組織し、上代文学会の事業としての、第三期上代文学会叢書刊行に向けて、平成28年度に公開の形で研究発表会を実施した上で、論文の執筆を行うことを確認した。執筆項目について、大まかに検討したところ、9名の「先代旧事本紀研究会」メンバーの専門分野の内訳が、日本文学8名、日本語学1名と偏りがあるため、鈴木正信氏(日本史学：文部科学省教科書調査官)、西岡和彦氏(神道学：國學院大學教授)に共同研究に加わって頂くことを依頼することにした。

(2)平成27年度には、書誌については写本調査を実施し、神話・伝説・系譜等の記事、神祇制度、国造制度、享受、表記、成立の各項目は、各執筆予定者が個別に調査研究を進めた。

(3)平成28・29年8月に行われた、上代文学会夏季セミナーに於いて、「先代旧事本紀研究会」のメンバーのうち8名が講師を務めた

ため、予定していた研究発表会の実施が困難になったため、平成29年9月9日に早稲田大学早稲田キャンパスを会場に、先代旧事本紀研究会を実施し、以下の発表を行った。

松本直樹「『先代旧事本紀』神代史の構想」

工藤浩「『天孫本紀』所載系譜の受容」

小林真美「本居宣長『古事記伝』における

『先代旧事本紀』の受容」

松本弘毅「『先代旧事本紀』の諸本について」

奥田俊博「『先代旧事本紀』における熟字と単漢字「誕生」と「生」」

発表者は、そこでの質疑を踏まえて、論文を執筆し、11月に入校した。

4. 研究成果

本研究の成果は、工藤浩編『先代旧事本紀の現状と展望』(第三期上代文学会叢書)として笠間書院より平成30年5月に刊行する。収録した論文10編の概要と、各論文で明らかにし得た点は以下の通りである。

第一部 構想と神話・伝説・系譜

(1)松本直樹「神から人への系統史 『先代旧事本紀』の構想と構成」：『先代旧事本紀』は、各巻の名称の示すように、陰陽、天神、地祇、天孫、皇孫、天皇、神皇、皇孫と継承される神から人への系統史の中に、天孫として物部氏を定位する構想が認められることを論証した。従来は、物部氏の起源と歴史という面に偏りがちであった『先代旧事本紀』の歴史観を明らかにした。

(2)小村宏史「『先代旧事本紀』における出雲系神格の位置 「天璽瑞宝十種」の造形に関する一試案」：これまで論じられることが殆どなかった、十種瑞宝の概念が如何にして作られたのかという問題を検討し、比礼と玉には出雲系、剣と鏡には宗像系乃至は賀茂系の要素の反映が認められることを論証した。

(3)伊藤剣「地祇本紀のオホナムチ 系譜の分析を中心に」：オホナムチの位置づけについての論。『先代旧事本紀』は、記・紀に既に見られるオホナムチをオホモノヌシの同神と見做す観念を更に進めて、これを三輪神とし、出雲大社の祭神にスサノヲを据える他の文献には見られない扱いをしていることを示した。

(4)工藤浩「『天孫本紀』所載系譜をめぐって」：ニギハヤヒ系譜をもとに、近世に『海人氏勘注系図』が作られたことを指摘し、『先代舊事本紀』の後世における受容は、神話と伝説だけではなく、系譜にも及んでいることを示した。

(5)鈴木正信「『国造本紀』研究の現状と課題」：国造制度と『国造本紀』の研究史を整理した上で、今後の展望について述べた。国造の配列順序を、記載されない国造に注目

して、「国造本紀」を編纂する際の史料が、大宝2年(702)に作られた「国造記」であることの根拠を示す。

第二部 学問と神道思想

(6)渡邊卓「先代舊事本紀の祭祀」：「述義」の分析から、『釋日本紀』の『日本書紀』解釈に於いて、『先代旧事本紀』が特に祭祀に関する事項の解釈に多く用いられる傾向を指摘し、『先代旧事本紀』の持つ祭祀文献としての性格を示した。

(7)西岡和彦「山崎闇齋と『先代旧事本紀』基礎的考察」：山崎闇齋の代表的述作物である『風水集』『風葉集』の検討から、闇齋の思想と学問に及ぼした『先代旧事本紀』の影響を考察する。闇齋は、寛永版本を用いて『先代旧事本紀』を見ていたが、本文が記・紀『古語拾遺』の抄録で本文の文脈が作られていることや、版本の本文の問題点を十分に理解して、テキストクリティークを徹底的に行ったことを指摘する。闇齋は、校合に『元元集』『神皇実録』のような伊勢神道系の文献だけではなく、当時は禁書であった『旧事紀大成経』も用いていたことを示した。

(8)福田武史「学問・注釈の世界における『先代旧事本紀』」：『令義解』『釈日本紀』を対象に、『先代旧事本紀』が有する学術的意義を検討した。『令集解』の鎮魂条の記事は、『先代旧事本紀』を直接引用したものではないこと、『釈日本紀』の『日本書紀』の解釈にとって、『先代旧事本紀』が不可欠の文献であった点を指摘する。

第三部 写本と表記

(9)松本弘毅「『先代旧事本紀』の諸本研究をめぐる現状と課題」：石川忠総本(神宮文庫蔵)、卜部一本・兼右本(天理大学附属図書館蔵)の詳細な文献調査に基づき、従来は兼永本とは別系統に分類されていたこの3本の祖本が兼永本であることを論証した。

(10)奥田俊博「『先代旧事本紀』における熟字と単漢字「誕生」と「生」」：「誕生」の用字分析により、『先代旧事本紀』がこれを天皇・天孫の出生の際に「生」と区別して用いる傾向が認められ、更には生まれた子の母が皇后でない場合は、物部・尾張系の子に限って用いられることを指摘する。

(1)(2)(3)(4)(6)(8)(9)は日本文学、(5)が日本史学、(7)は神道学、(10)は日本語学にそれぞれ立った論である。日本文学に偏る傾向は否めないが、各執筆者は専門の分野に限らずに、必要に応じて隣接諸学の分野に踏み込んだ論を展開しており、『先代旧事本紀』についての新たな見解と今後の課題とを、学際的に示し得た内容となっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

(1)伊藤剣「出雲国風土記」の『日本書紀』受容態度』『上代文学』第120号(査読有)2018、63-76

(2)渡邊卓「皇典講究所・國學院と『古事記』」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第10号(査読無)2018、19-34

(3)渡邊卓「記紀歌謡の世界 文献に収載されることをめぐって」『古事記學』第4号(査読無)2018、87-97

(4)工藤浩「大嘗祭の本義に関する私見」『古代研究』第50号(査読無)2017、51-55

(5)小村宏史「垂仁紀靈果将來說話の意義 常世国よりもたらされるもの」『上代文学』第118号(査読有)2017、22-58

(6)松本弘毅「『先代旧事本紀』兼永本と兼右本の関係」『国文学研究』第183集(査読有)2017、1-14

(7)伊藤剣「現伝『出雲国風土記』の成立をめぐって」『国語と国文学』第94巻第6号(査読有)2017、17-32

(8)小林真美「折口信夫と中山共古 接点と影響を中心に」『東京理科大学紀要(教養篇)』第49号(査読無)2017、1-27

〔学会発表〕(計7件)

(1)工藤浩「『先代舊事本紀』所載系譜の受容」古事記学会4月例会、2017

(2)松本直樹「『先代舊事本紀』神代史の構想」先代旧事本紀研究会(上代文学会)2017

(3)工藤浩「『天孫本紀』所載系譜の受容」先代旧事本紀研究会(上代文学会)2017

(4)小林真美「本居宣長『古事記伝』における『先代旧事本紀』の受容」先代旧事本紀研究会(上代文学会)2017

(5)松本弘毅「『先代旧事本紀』の諸本について」先代旧事本紀研究会(上代文学会)2017

(6)田俊博「『先代旧事本紀』における熟字と単漢字「誕生」と「生」」先代旧事本紀研究会(上代文学会)2017

(7)工藤浩「『先代舊事本紀』編纂論序説」古事記学会11月例会 2015

〔図書〕(計3件)

(1)工藤浩編(松本直樹、小村宏史、伊藤剣、工藤浩、鈴木正信、西岡和彦、渡邊卓、福田武史、松本弘毅、奥田俊博、小林真美、星愛美の論文、コラムを掲載)『先代旧事本紀の現状と展望』(上代文学会叢書)笠間書院、2018、印刷中

(2)瀨間正之編(奥田俊博、工藤浩、渡邊卓の論文を掲載)『「記紀」の可能性』竹林舎、2018、540

(3)桜井宏徳編(福田武史の論文を掲載)人間文化研究機構 国文学研究資料館、2018、印刷中

6. 研究組織

(1)研究代表者

工藤 浩(KUDOH, Hiroshi)
日本工業大学・工学部・教授
研究者番号：90636101

(2)研究分担者

渡邊 卓(WATANABE, Takashi)
國學院大學・研究開発推進機構・助教
研究者番号：10726011

福田 武史(FUKUDA, Takeshi)
武蔵大学・人文学部・准教授
研究者番号：20752075

奥田 俊博(OKUDA, Toshihiro)
九州女子大学・家政学部・教授
研究者番号：30343685

松本 弘毅(MATSUMOTO, Hiroki)
早稲田大学・文学学術院・客員主任研究員(研究院客員准教授)
研究者番号：30434244

小林 真美(KOBAYASHI, Masami)
東京理科大学・理学部第二部教養・講師
研究者番号：30548144

松本 直樹(MATSUMOTO, Naoki)
早稲田大学・教育総合科学学術院・教授
研究者番号：50239109

小村 宏史(OMURA, Hiroshi)
沼津工業高等専門学校・教養科・准教授
研究者番号：50734688

伊藤 剣(ITO, Ken)
明治大学・法学部・専任講師
研究者番号：70453991